

梅花の水指

京都の代表的な陶磁器である京焼の大成者、陶芸家・野々村仁清の作の水指である。1950 年、17 世紀の茶器の典型として、その優れた芸術性から重要文化財に指定された。

仁清は、17 世紀半ばから後半にかけて京都で活躍した人物である。有田（佐賀県）や瀬戸（岐阜県）で学んだ後、京都で宗和流茶道の開祖・金森宗和（1584-1656）の支援のもと自らの窯を構えた。宗和は、仁清の作風と宗和の茶道哲学を一致させるように指導し、朝廷の人々に仁清の作品を広めることに貢献した。

水指は「ミズサシ」と呼ばれ、茶の湯で使われる。釜に水を入れたり、茶碗をすすぐためのものである。お茶会の際、亭主が茶室に道具を持ち込むスタイルでは、水差しを先に持ち込むのが一般的だ。しかし、水差しはサイズが大きく、水を入れるとかなりの重さになるため、あらかじめ茶室に置かれることが多い。これは直径 23.4cm の大きさである。

この作品の梅の木は、釉薬をかけて焼いた作品の上に色釉をかける「色絵」技法で作られたものである。その後、再び低温で焼成し、2 層の釉薬を融合させる。絵の具が化学反応によって発色したり、焼成中に液体になったりするため、陶芸家は材料の挙動をよく理解していなければ、思うような効果を得ることができない。

仁清は、色彩豊かな図柄を表現するために、このようなやや黄みを帯びた白色の釉薬をベースとして厚く塗り重ねることが多かった。この作品では、梅の木と花が赤、黒、緑の釉薬で描かれ、金彩で立体感を出している。花の部分には、時間の経過とともに酸化する銀彩を使って、少し光沢のあるグレーを表現している。また、仁清が幹や枝に施された緑色の濃淡で、樹木の樹皮に付着した地衣類を巧みに表現している。

また、仁清は加賀藩（現在の石川県、富山県）の九谷焼の発展にも大きな影響を与え、藩主前田家やその家臣たちは仁清の作風を深く称賛し、多くの作品を所蔵した。